フェイス

綾乃

　好きな音楽って、特別。聞いただけで暗ぁくなったり、幸せになったり、テンションを上下されたり。好きすぎて携帯音楽端末でリピートしまくったり、カラオケで歌って九十点台出せちゃったり…とにかく、特別。
僕にとっては、黒白。
　黒白というのは、インディーズのヴィジュアル系バンドで、僕が最も必死で追いかけているアーティストだ。黒白は「あやめ」と読む。意味もわからずにかっこいいからという理由でフェイスが付けたらしい。
　フェイスは痩せて背の高い二十代後半の、雰囲気だけイケメンな黒白のヴォーカルだ。ころころと変わる髪色は今は金色で、長い前髪の先端を尖らせたヴィジュアル系にはよくいる、悪く言えば没個性的な髪型をしている。
　それでも、その声は僕たちファンにとって、ひとつも貶すところがなかった。
　伸びやかで、高音のビブラートがきれいで、歌ってるとき誰より楽しそうな顔をする。初めてそれを聞いたとき、僕は背中がピリピリした。おそらく、「電流が走った」ってやつだと思う。この人は歌うために生まれたんじゃないか、歌ってないときっとみるみるうちにくたくたになってひからびて死ぬ、そう思った。

◆

僕はその日、黒白のライブに来ていた。
ライブ仲間のバンギャル、アザミちゃんと一緒に、会場前にぼうっと立って話をしていた。
「新曲、聴いた？　着うたで先行配信とかセコい商売するようになったよね」
「聴いた、聴いた。でも、セコい商売するようになったのがまた、なんというか…大きくなったなあみたいな気がしない？」
「するよねえ。悔しいね」
　アザミちゃんは携帯で新曲を流し始めた。「さよなら」というタイトルのその曲は、方向性がめちゃくちゃでコンセプトもない黒白の曲の中でもかなり浮いたバラードで、その曲にはフェイスの綺麗な声がぴったりはまっていた。
「カユちゃん、スカートぶつかってるよ」
「おおっと」
　僕は鉄柵にぶつかっていたスカートを手で叩いて払った。僕とアザミちゃんが着ているのは、ロリータ服。アザミちゃんはピンクや赤の甘ロリ。内面はキツいけど顔は童顔だから良く似合う。僕が着ているのは黒を貴重としたもの。スカートをパニエで膨らませているため、よく物にぶつかるのだ。
「やっべ、入場開始したよ！　カユちゃん、荷物、はやく詰めて」
　僕たちはロッカーに荷物を詰め込み、チケットを握り締めて走った。

ライブが終わって、僕たちは笑顔でロッカーから荷物を取り出していた。
「もう、超楽しかった、今日！　「人生二度美味しい」やるとは思わなかった！」
「「人生…」、大好き。フェイスのヘドバン見れるし」
今日のセットリストについて話しながら、引っ張り出したポーチで化粧を直す。
「打ち上げしよーぜっ。カユちゃん何食べたい？」
「居酒屋がいいなあ」
どろどろに溶けたアイラインを綿棒で拭って、新しく書き直す。
僕たちはライブ後は居酒屋やカラオケに行き、食べたり歌ったりした後に、バンドから配られたアンケートを熱心に書き、今日こられなかった友達のためにＳＮＳにライブレポートを書くのがお決まりになっていた。
化粧を直し終わって、二人で駅に向かって歩いていた。バンギャルがぞろぞろと流れていく中でも、フリフリ二人組は目立つらしく、チャラチャラした（フェイスもチャラチャラしてるけど…）男二人が僕らの前を遮った。
「かわいいねー。なに、どこいくの？」
「飲みに行かない？」
僕らは顔を見合わせて、
「無理！　忙しいから！」
とアザミちゃんがスッパリ断った。
「えー、いいじゃん」
しつこく通せんぼをする男にイライラして僕はアザミちゃんの腕を握り、
「これからデートですからー」
とできるかぎりの低い声で言って、ぽかんとしている二人の間を通り抜けて早足で逃げた。
「カユちゃん、男らしい！」
「一応男の子ですから」
そう、僕はこんなナリだけども心も体も男の子。ロリータが大好きで着てるから男子だと気付かれることはまずない。フェイスよりさっきの二人よりチャラチャラしてるのは僕かもしれない…。
アザミちゃんと居酒屋でお酒を頼み、二人でアンケートを出して、細かい字で今日のライブについての感想を書き込んだ。セットリスト最高でした、今日もフェイスの歌良かったです……ふとアザミちゃんのほうを見ると、フェイス以外のメンバー練習しろ！　と大きな文字で書いてるのが見え、僕は苦笑いした。
居酒屋の閉店時間までそこで黒白について熱く語った後、僕たちは別れた。
ギリギリ電車がある時間だったから、それに乗ってうとうとする。周りの乗客が派手な僕を見ているのがわかった。
僕は、いわゆる女装男で、ロリータだけど、心は普通に男で、女の子に恋をする。目立ちたいからそんな服を着てるんだろうとか言われることもあるけど、好きな服を着ているだけで、目立つのがほんとはあんまり好きじゃない。矛盾してるって言われるけど、それが事実。
ＭＰ３プレイヤーで黒白の曲を聴きながら、僕は眠気を覚まそうと目を瞬いた。

家に帰って、黒いワンピースを脱ぎ、部屋着に着替える。好きなメゾンのＴシャツに、やわらかい素材のズボン。化粧を落とした自分は男にも女にも見えて、そしてそのどちらにも見えなくて気味が悪くすらあった。

次のワンマンライブは一週間後、今度はキャパ四百人のハコだった。
アザミちゃんは赤にドット柄のワンピース、僕はエプロン付きワンピースで黒いアリスと言ったイメージ。僕たちは互いに今日の服を褒めあって、それから黒白の話をした。
「今日重大発表あるとか言ってたけど」
今日ハコへ来るまでにメールでも話していた話題。
「なんだろうねー。メジャー行くとか？」
「えー、キャパ四百でソールドアウトしないのにメジャー？」
「ないか」
ヴィジュアル系シーンは今、結構乗りに乗ってて、同じ頃に結成されたバンドがバンバンメジャーに行き、武道館でライブをしたりＣＤがオリコンで十位内に入ったりする中、黒白はなかなか売れないバンドだった。
「なんで黒白は売れないのか」という会議をときどき、アザミちゃんの友達を交えて開催するけど、いつも「フェイス以外の演奏が下手だから」という結論になる。演奏が下手でも、ヴォーカルだけ上手ければメジャーに行けたバンドもいるんだけど。運がないのかもしれない。
「重大って言っておいて実は全国ツアー決まりましたーかもよ」
「ああ、ありそう」
偶然遭遇したアザミちゃんの友達も交え、重大発表について盛り上がる。僕たち以外のバンギャルもみんな、そのことについて意見を酌み交わしているようだった。
「全国ツアーってまだやったことないよね？」
「東名阪くらいだねー。全国にファンいるのか？　埋まるのか？」
「アザミちゃん全通でしょ？」
「東名阪は行くけどー
「まだ決まってないのにー」
女の子がいっぱい集まると僕はなかなか口を挟めなくなる。でも笑って聞いているだけで楽しい。
楽しかった。
何も不安はなかったんだよ、フェイス。

ライブ中、「トリックスター」という暴れ曲でフェイスがダイブした。ステージから跳んだフェイスは僕の真上に落ちてきて、おおっと、とその身体を支えステージの方へ返した。
フェイスは歌が好きで好きで、だからマイクから手を離し跳ぶダイブは滅多にしなかった。機嫌がいいのかなあとかアザミちゃんと笑って、煽られるままにヘドバンした。
でもフェイスは今日は、にこにこしてるけど歌うのは苦しそうで、体調が悪いのかな、とか、ライブ続きで疲れてるのかな、とか思った。
だからいつもより余計に「フェイスー！」と両手を広げて高い声で叫んだ。
二回目のアンコールの最後、フェイスはマイクスタンドにすがるように立って俯いた。「フェイスー？」と、心配する声があちこちから上がった。
「黒白は」
フェイスがぽつりと口を開いた。
他のメンバーも俯いていた。
——ウソだ。
僕はそう思った。こんなの、冗談だ。
「黒白は、十一月十五日のライブを持って、解散します」
隣でアザミちゃんが膝から崩れた。
いや！
どうして！
やめないで！
周りから叫び声が上がる。
「ごめんなさい。黒白はこのまま活動を続けるのが困難な状態になりました」
どういうこと？　どういう意味？
「言ってくれなきゃわかんないよ、フェイス」
アザミちゃんが泣きながらふらふらと立ち上がる。
「詳細はオフィシャルサイトを更新します。…ごめんなさい」
いつものフェイスらしくない、しょんぼりとした声でそう呟き、彼らはステージから消えた。
このまま二度と、ステージの上には現れないんじゃないかという気がして、僕たちは会場スタッフに押し出されるまでその場を離れられなかった。

◆

ライブから一週間が過ぎた。
何も手に付かない…ことも、なかった。ずっと黒白のことを考えてはいたけど、バイト先では忙しさのおかげで忘れていられたし、食事も喉を通らないなんてこともなかった。
それでもやっぱり、黒白の解散ライブを思うと胃がキリキリした。
あの日のライブの後更新されたオフィシャルサイトには、メンバー全員からのコメントが載せられていた。けど、核心が、つまり何故解散するのかがどこにも書いてなくて、僕もアザミちゃんも、みんな納得出来なかった。

　黒白は売れないけど、いや、売れないから大丈夫。そう思っていた。劇的な変化もなく、メンバーも仲が良すぎず悪すぎず、中途半端。だからこそ、大きな問題がなくて平和で、解散しない。
　ううん、本当は理由なんかなくて、ただ解散してほしくないだけだったのかもしれないけど。
「いらっしゃいませ」
　コンビニ特有の、扉が開いたことを知らせるチャイム音に顔を上げると、見覚えのある…ありすぎる女の子が立っていた。
「あ、アザミちゃん？」
　僕はレジから出てアザミちゃんに駆け寄った。アザミちゃんはいつものピンクのワンピースで僕にしがみついた。
「カユちゃん。カユちゃん、私、どうしよう」
「…うん」
　黒白が解散するのはつらいよね…とアザミちゃんを落ち着かせようとしたら、
「なんか、あのね、血迷って……友達と一緒にライブすることになっちゃった」
「は？」
　は？　としか言いようがなかった。黒白の話じゃないの？
「いつもハコで会う、ちーちゃんがベースとボーカルで、私がギターで、ドラムは探してて、それで」
　アザミちゃんはそこでゴホゴホとむせて咳き込んだ。
「お、落ち着いて」
「落ち着けないよ！　やっぱできないって言わなきゃ」
「うん、そうしたほうがいいと思うけど…」
　今までアザミちゃんがギターの話をするのは聞いたことはなかった。ピアノくらいしか弾けないよ、と言っていたこともあるような気がする。
「でも、でもねカユちゃん」
　むせたせいで涙目になった瞳を僕にむけ、困ったように続ける。
「ステージに立ってみたいんだ。フェイスの気持ち分かってみたいんだ」
　フェイスの気持ち。
　今は、何で解散なの、って、フェイスの気持ちは今までで一番わかんない。
　ステージに立ったら、わかるんだろうか？
　ステージに何か、あるんだろうか？
「…応援するよ」
　僕はそれしか言えなかった。止める気もしなかった。
　少し羨ましかった。フェイスの気持ち。僕にもわかるだろうか？

アザミちゃんはその日からギターの猛練習を始めたという。
指にたこができて、見るに堪えないと自分で言いながら泣いていた。
彼女は精神が不安定で、時々僕が働くコンビニに泣きながら話をしに来たので店長になんとかしてくれと怒られ途中退勤し、ギターの練習につきあうこともあった。
壁の薄いアパートで僕達は膝をつき合わせ、アザミちゃんはギターを弾いた。何回やっても下手くそだった。夜中に隣人が玄関の戸を叩きに来るまで続けた。

◆

ライブの日は、十二月十六日。黒白のラストライブの一ヶ月後だ。正直、そんな日にライブができる精神状態でいられるとは思えなかった。フェイスの気持ちなんてどうでもよくなってしまうかもしれない。
でも、だんだん僕はアザミちゃんたちのライブを心から応援したくなっていた。彼女たちが何か見つけたら…フェイスがステージであんなに楽しそうにしていた理由がわかったら、僕もきっと、これからのフェイスのこともまっすぐ見られるかもしれない。
次のバンドをやるならばついていく気になるかもしれない。やめるなら、それはやっぱり嫌だけど、バンドマンのフェイスじゃない普通の二十代男子としての幸せを願うことができるようになるかもしれない。
その方がきっと、黒白がいい思い出になる。

◆

フェイスについての噂が出回ってきたのは、十月の後半だった。
アザミちゃんの指先は硬く、見る人が見ればギターを弾いているんだなとわかる(らしい)仕様になり、多少上達し始めていた。
黒白やいろんなバンドの噂に詳しい(インターネットで探す他にも大人の関係からくる情報源があるんだそうだ)アザミちゃんの友人が、そっと教えてくれたらしい。
アザミちゃんの家で最近には珍しくギターには触らず、お酒をちびちび唇に付けながら話をした。
「噂なんだけどね。…あの子のいうことだから信憑性あるのかわかんないし、噂なんだけど」
そんな前置きをして、アザミちゃんがぐびっと酎ハイの缶を仰ぐ。
「フェイス、…喉に腫瘍ができて、取ると声でなくなるんだって」
「えっ」
フェイスさんは歌えなくなったら死ぬような気がします。
昔、インストアイベントで彼にそう言った。
あの時はきっとフェイスも腫瘍なんて、なかったか、知らなかったかで、笑って「俺もそう思う」って言って。
それからもずっと、思っていた。歌えなくなったら、フェイスじゃなくなる。

残酷にも、思っていた。
「噂、だからね」
うん、と頷いた。けれど、どうしても、真実に思えてしまった。
もし真実ならば。
フェイスはいなくなるのだろうか？　フェイスじゃなくなるのだろうか？

十一月十六日は来た。
来ないような気さえした、黒白のラストライブ。
アザミちゃんと僕は白と黒の色違いのジャンパースカートで、会場を待っていた。
時間が止まってほしい。きっとここに集まったみんなが思っているだろう。
アザミちゃんと僕は喋らず、僕は周りの声を聞いていた。
フェイスの腫瘍のことは、もうみんなが知っている噂になっているようだった。
アザミちゃんは自分の指先を見つめていた。

◆

そんな空気を吹き飛ばすように、ライブは暴れ曲から始まった。　爆発するようなイントロ、床が抜けるようなジャンプ、ドラムとベースがハコをまるごと揺らし、ギターはいつもより音量が大きい。
何か、諦めに似たものを感じた。破れかぶれで、ラストライブをしてる、そんな感じ。
MCは入らず、アンコールまで黒白は一曲一曲を駆け抜けた。どんどんフェイスは声が出なくなっていった。
フェイスはいつもどおりに見えた。頭を激しく振り、よろめいてマイクスタンドにぶつかって笑う。
それを見て、少しだけ安心したようにファンも頭を振り、メンバーの名を叫ぶ。
いつもとかわらず。
「疲れた？」
MCで息のあがったフェイスが笑いながら言った。
緩い喋り方は、いつもとかわらない。
「こんなもんで疲れてんなよ！　…俺？　俺は歳だから仕方ない」
笑うバンギャル。それも、いつもとかわらない。
「…楽しかった黒白も、今日で解散です」
それだけが違う。
メンバーも突然、真顔になる。周りのバンギャルたちも、すすり泣き始めた。けど、僕もアザミちゃんも、泣かず、まっすぐフェイスを見つめ続けた。
「楽しかった！　これはほんと。すっげー楽しかった。喧嘩もしたし、おまえらは俺のこといじめるし、ほら、センスが悪いとかって…でも、そんなのも今は愛しい」
フェイスはため息をつき、喉に手を当てた。そしてすぐに離し、
「これからは黒白としてではなく、バンドを続けたりするかもしれない。でも、黒白はなくなっちゃうけど、なくならない。存在したのはほんとだから。だから、泣くな」
そう言いながら、フェイスは鼻をすすった。
「最後に、聞いてください。“さよなら”」
もうずっと前に感じるあのライブの日に、貶しながらもいい曲だねといい合ったその曲は、きっと今日を想定して書かれた曲だったのだろう。フェイスの歌声は、終わりも始まりも、すべて

を感じさせる、いつもと同じなのに遠くへいったかのような歌だった。
　声はボロボロで、歌詞も間違って、隣にいた女の子がもういい、と泣き始めた。
　よくないよ。最後まで聞かなきゃ。フェイスが、こんなにも必死に歌うの、聞いたことないよ。
　いつも楽しそうなフェイスが好きだった。時々苦しそうでも、歌うのが好きって感じられるフェイスが。
「“さいごに　きみに”」
　曲はラストのサビに入った。
「“つたえよう”」
　高音が美しかったフェイスの声。でも、今日は、出なかった。
　“最後に君に伝えよう、大好きだった”。
　誰にでも書けるような歌詞だって、フェイスの歌声なら、何もかも違った。でも、それが今日は出なくて。
「…ありがとう…」
　しわがれた声でつぶやき、フェイスはマイクをスタンドに戻してステージを去った。
　ありがとう！
　行かないで！
　フェイス！
　行かないで！
　何百人の声がフェイスに向かって叫んだ。フェイスは戻ってこなかった。他のメンバーも、頭を下げたり、ピックを投げた後、ステージから袖へ、消えていった。

◆

　アンコールの声は、鳴りやまなかった。
　スタッフによって押し出されるように会場を出た僕達は、フェイス、フェイス、と呼びながら泣いた。
「次は私の番」
　アザミちゃんは地面にべったり座り込んで泣きながら言った。
「フェイスは最後までフェイスだった。私も、決めた。もう、やる」
　僕も泣きながら、頷いた。
　その日、アザミちゃんと待ち合わせは会場だった。だから、早く来て僕は、フェイスに宛てて書いた手紙をプレゼントボックスに入れてあった。
　封筒の中に、アザミちゃんのライブのチケットを一枚入れて。

ヴィジュアル系バンドのメンバー死亡
　先月16日に解散したヴィジュアル系バンド「黒白(あやめ)」のヴォーカル、フェイス(26)が先月30日死亡していたことがわかった。

「死因は明らかにされていないが…自宅が火災…」
　そこまで読んで、アザミちゃんは洗面所に走った。
　今朝、新聞でこのことを知った僕は、アザミちゃんの家に来て記事を読ませた。
　記事にはそれ以上のことは書かれていなかった。
僕は洗面所へ追い掛けていき、彼女の背中を擦った。
「げほっ…ごほっ、ごほっ」
　泣きながら嘔吐するアザミちゃんを見ながら、意識がぼんやりとしていくのを感じた。
　何もかもが嘘みたいで。何を信じていいかわからない。
「フェイス…」
「…信じ、られないよね…」
「うん…なんで…？」
　吐いて落ち着いた…というか、信じられずまだ半信半疑でいるアザミちゃんはベッドに座り携帯を開いた。
「…メール、いっぱい来てた。フェイス、本当に死んだの？」
「…」
「フェイスが私たち置いていくなんて、信じられないよ」
　その日の午後には、オフィシャルサイトでフェイスの死亡が公式に発表された。
　僕はバイトをさぼり、アザミちゃんと二人で雨の降る窓の外を眺め続けた。

◆

　一週間のうちに、アザミちゃんとライブをするはずだったメンバーから、断りの連絡が届いた。
　こんな時にライブなんて、とてもできない。
　もう、黒白の曲もフェイスの歌も名前も聞きたくない。
　彼女たちはそう言っているそうだった。
　アザミちゃんはずっと俯いて、フェイスなら、とか、フェイスは、とか、呟いていた。
　僕はバイトをクビになり、ずっとアザミちゃんの部屋に居座っていた。
「カユちゃん」
　アザミちゃんは弱々しい声で僕を呼んだ。
「カユちゃん。私が、ライブ、まだやりたいって言ったら、どう思う？」
「…強いなって思う」

「…カユちゃん、私、やるよ。一人で歌うよ」
　僕は頷いた。
　もちろん、こう続けた。
「僕で良ければ一緒にやるよ」

会場はキャパ百の小さなハコ。その日は、学生バンド、ヴィジュアル系入り混じったライブだった。
入りの時間、僕達はアザミちゃんの家で着替えていた。
もちろん、僕達の正装、ロリータに。
アザミちゃんはピンクのケープ付きワンピース。僕は冷静に考えなくても馬鹿なことに、お気に入りの別珍のワンピースを着た。
ライブハウスってのは、暑い。ステージはもっと暑い。そんなのわかってたのに、晴舞台に着ずに入られないくらいそのワンピースがお気に入りだったのだ。
それに普段は身長を気にして履かない厚底靴を履いた。僕の身長は180センチを越えた。
「見た目だけは一人前だよね」
ライブ前のテンションというものなのかすっかり元気な僕達は、ギターだけ持って部屋を出た。
ハコに到着したのは、一組目のバンドが始まった頃だった。
リハーサルに出なかったことを怒られつつ、「出番が来たらこれを流してください」とCD-Rを手渡した。楽器はギターしかいないことを説明すると、ぽかんとした表情をされた。
楽屋で知らないバンドのメンバーたちにじろじろ見られながら、二人で緊張と恐怖にガタガタ震えた。
「フェイスもこんなに緊張したかな」
「きっと初ライブはしたんじゃないかな」
僕達の会話はいつもフェイスのことばかりだった。

◆

「“フェイス”さんスタンバイしてください」
スタッフの人に呼ばれ、僕達はステージに向かった。
僕たちがステージに現われたとき、一部が騒めいた。正しくは一部とまた別の一部、二部とでも言うか。
僕達が呼んだサクラと、アザミちゃんのおもちゃのようなギターを見てこれはおかしいぞと早くも気付いた人たちだ。
サクラは、アザミちゃんの友達と、学校の後輩など多少はヴィジュアル系のライブに明るい女の子たち十五人くらい。
おもちゃギターはバンドステッカーがベタベタと貼られ、チューニングも適当な代物。
そんなロリータな男女二人で、黒白の曲を歌った。「さよなら」を。

さよなら　さよなら　またいつか
来世で合うこともあるだろう
さよなら　さよなら　もう二度と
この美しい世界では会えない
さよなら　さよなら
付いてきてなんて言ってごめんね
最後に　君に伝えよう　ありがとう

正直言って、盛り上がんなかった。
バラードだし、盛り上がる曲じゃないからっていうのもあるけど、僕達はそんなに歌も上手くないし、楽器はアザミちゃんの下手なギター以外CDを焼いたインストゥルメンタルだし。
それでも、ステージからの風景は、僕には夢のようだった。
いつもフェイスがいた「向こう側」から見る世界。
眩しくて客席はあまり見えないけど、そのお陰で実際より広いハコに錯覚する。
誰も僕の歌で感動なんかしない、自己満足のライブ。
それでいいと思ったのに。
CDのアウトロが終わると、興味なさげにしていた客も拍手をした。
小さなハコに、拍手が響いた。見上げる顔は光って輝いて見えた。
涙がぽたりとマイクに落ちた。
フェイス、死んじゃ嫌だよ！」アザミちゃんが泣きながらその場に座り込んだ。泣き喚くアザミちゃんの声は拍手を止めた。
「フェイス、私も連れてってよ！　置いてかないでよ！」
全身が燃え上がるように熱かった。たった四分二十秒なのに、疲労していた。
一週間、フェイスの死に堪えできた心が、せき止めていた何かを流しだすのを感じた。

ねえフェイス、これがあなたが作った最高の唄だよ。

下手くそなカラオケで拍手が貰える唄だよ。

燃える、燃えろ、この身体。

フェイスが死んだ炎のように。